

音楽授業における表現の過程にみる自己調整の様相

学籍番号 249340

氏 名 徳増春花

主指導教員 藤本佳子

副指導教員 兼平佳枝

1. 背景

□現在、生徒が学びを自己調整する態度を育むことが学校教育全体で求められている。では、音楽科の学習における自己調整とはどのようなものなのであろうか。音楽教育において、自己調整は演奏技能向上のための方略として捉えられてきた傾向がある。従ってこれまでの研究では音楽授業の表現の過程における自己調整の様相はほとんど検討されてこなかった。しかし、自己調整は単なる技能向上のための方略ではなく、音楽表現そのものを推進するものなのではないだろうか。筆者は、音楽科において生徒が自身の学びを自己調整する態度を育むためには、まずは音楽の本質である表現という行為における自己調整の様相を知る必要があると考えた。そこで、本研究では、音楽科授業での表現の過程における自己調整の様相を明らかにすることを目的とした。筆者は、ここに本研究の独自性があると考えている。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、音楽科授業の表現の過程における自己調整の様相を明らかにすることである。

研究の方法として、まず、本研究におけるキーワードである「表現」と「自己調整」の意味について辞書や各概念に関する文献を参照して整理し規定した。次に、生徒が「表現」することを企図した中学校音楽科授業の計画・実践を行った。そしてその実践分析を行い、音楽表現の過程における自己調整がどのように見られるのかを明らかにした。最後に、結論と考察を述べた。

3. 本研究における用語の規定

本研究における「表現」と「自己調整」の意味について以下のように規定した。

本研究では「表現」を、音や音楽に働きかけ、働き返されたことを基にまた音や音楽に働きかけるといった相互作用をくりかえし、演奏と自身のイメージの両方をつくり変えていく過程という意味で用いることとした。「自己調整」は、自身の行動や感情を観察し、自身の持つ基準と比較し評価して行動や感情を調整することという意味で用いることとした。また自己調整の過程はZimmermanとSchunkの「自己調整学習」の理論に拠り、予見段階、遂行段階、省察段階の3つの段階が循環する過程と捉えることとした。

4. 研究授業の実践と分析

筆者は、中学校第1学年を対象に、生徒が「表現」することを企図した中学校音楽科授業の実践を2つ行った。1つ目の実践（以下実践①）は、自分のイメージにあった《さくらさくら》を演奏するために箏の4つの奏法を使いアレンジするという器楽の授業である。2つ目の実践（以下実践②）は、紙を使った創作の授業で、紙の様々な音を探してその音からイメージしたことを基に班で音楽作品をつくるというものである。

授業分析においては授業記録と学習の中で生徒が記述したワークシートをもとに分析を行った。本研究では、表現過程において生徒がどのように自己調整を行っているのかということを見るため、抽出児を設定し、生徒が「表現」を行うことを期待して設定した活動の場面を抽出場面とした。

抽出した場面における分析の視点は以下の2点とする。

- ア) 自己調整の3つの段階にあたる場所はどこか。
- イ) 予見・遂行・省察段階の具体の姿はどのようなものか。

5. 結論と考察

研究の結果、音楽授業における表現の過程にみる自己調整の様相は、自身のイメージを音や音楽で表すことを目標として、イメージにあった演奏方法を考え、考えた演奏方法を試行して鳴らした音の質を観察し、イメージと照らし合わせて鳴らした音の質を判断し、イメージ通りでなければ演奏方法や元のイメージを調整する姿であることが明らかになった。また、音のイメージが調整の軸となっているという特徴も明らかになった。

以上の結果から音楽授業の表現における自己調整を促す教師の手立てが検討できる。音のイメージが調整の軸になっていることから、音からイメージをもつために環境の調整や教師の働きかけ、学習活動の工夫が必要であると考ええる。また、本研究の実践では、他者とともに音を観察する姿がみられた。他者と協働する場面を設定することも表現における自己調整を促すうえで有効であると考ええる。